

双月刊行有料宅配誌／編集兼発行人・中村公彦

蒼蒼

株式会社蒼蒼社／東京都町田市森野2-26-16

書評『鄧小平・政治的伝記』

矢吹 晋

(横浜市立大学教授)

楊炳章著『鄧小平・政治的伝記』(朝日新聞社刊、一九九九年)は、いかなる書物なのであるうか。

著者楊炳章(ペンジャミン・ヤン)はハーバード大学で博士号を得た気鋭の学者とされ

ている。その成果を認められて、いまは中国人民大学国際政治系教授らしい。記者は朝日新聞社中国総局長加藤千洋氏(夫妻)である。そしてこの本は、ハーバード大学フェアバンクセンターで著者と面識のあった慶応義塾大学法学部教授国分良成氏が記者に紹介したものだという。

ブランドがこれだけ揃うと普通の読者にとっては安心であるう。ところが、本書はブランドの危うさを示す恰好の反面教師ではないかと思われる。

「まえがき」に「ニューヨーク州立大学のマーク・セルドン教授」(二ページ)とあるが、これは「マーク・セルデン教授」と表記するのが普通である。日本語に堪能な同教授はみずから「セルデンです」と電話口で名乗るのが常である。私の書評に接したら、わが旧友セルデン教授は、このような本に「謝辞」を書かれたことに苦笑するに違いない。

鄧小平は狡猾な経営者か

「鄧小平は(実利主義者というより狡猾な経営者で、うまく人を選び、彼らに信頼をおいた)」(訳書二ページ)。

Despite his reputation, he was less a *economic thinker than a skillful manager*, choosing good people, and trusting them somewhat more than Mao did. (p.x. 傍線イタリック。) 内は矢吹。以下同)

これは忠実な訳といえるであろうか。試みに訳せば「その評判とは違って、彼はエゴニストというよりは、有能な経営者」の意である。「狡猾な経営者」と「有能な経営者」ではニュアンスがまるで異なる。

(著者は)政治家鄧小平を語り、狡猾で素早い、いつも賢明とは限らないという(訳書四ページ)。

He finds him *clever and quick*, but not *always wise*. (p.xii.) *clever and quick*を「狡猾で素早い」と訳すのは適当であるうか。記者の偏見を感じないわけにはいかない。

鄧小平の「悪魔の心」とは

「鄧小平の伝記を書くのはたやすい仕事ではない。彼は、自分の悪魔の心を公にしなかった」(訳書三ページ)。

It is not an easy task to write a biography of Deng. His private demons were kept

private indeed. (p. x.)

private demons を「悪魔の心」と訳すのは適当であろうか。これはドイツ語のデーモン(Dämon)なつまり「鬼神に取りつかれたような人間」の意ではないのか。ここを「悪魔の心」と訳して、仲間への肅清たえば李明瑞と重ねると、吸血鬼のような鄧小平像になるおそれがある。これが訳者のイメージなのであろうか。

李鉄映の出生について

「私の個人的判断では、この劇的出会いによって李鉄映・現政治局員(国家教育委員会委員)が生まれた。三六年の長征終了後しばらくしてのことである」(訳書九九ページ)。この箇所に楊炳章は以下の注記を加えている。「李鉄映の出生の背景に関しては私の憶測に過ぎず、有力な根拠を得られていない。一九八八年二月にハーバード大学東アジア研究フェアバンクセンターにおいて、これらについて徹底的な討論を行った」(訳書三三六ページ)。

ある人間の品性あるいは名譽に関わる重大事について、本文では上記のように表現し、巻末の注記においては、「憶測に過ぎず、

と逃げを打つ。みずからの責任を極力回避しつつ、誹謗中傷を加えるのは卑劣な作風である。

かつて中国ではこの噂が広く流布したことがある。それは李鉄映と鄧小平の関係から生まれた憶測である。李鉄映を鄧小平が可愛がっていたのは事実である。李鉄映が恐らく「パパ」と呼んでいたのは聞いたことはないが(おそらく事実であらう)、と想定できる。李鉄映から見て鄧小平は「母の前夫」であり、しかもその離婚は、政治的状况のもとでいわば強制されたものであるからだ。事柄は鄧小平から見ても同じだ。李鉄映は自分の子ではないが、かつて愛した妻の子である。それを庇護するのは鄧小平の男気というものであろう。なお、原書三二八ページでは「李鉄映(娘)」と男女を取り違えた妙な説明がある。

非客家説について

著者楊炳章はこう書いた。

「彼(鄧小平)が革新的なのは、他所から移り住んできた客家だから、というのも勝手な想像である」(訳書二八ページ)。

ここで楊炳章の注釈は以下のごとくであ

る。

鄧の伝記の多くが鄧の客家出身説をとり、革命家としての一生に大きな影響を与えたことを強調する。「鄧の故郷を取材中、彼を客家の出身という村人は皆無だった」。

私自身は「鄧小平」(講談社 現代新書)において、客家説をとっている(現代新書、一五ページ)。そこで、「鄧伝記の多くが鄧の客家出身説」をとっていることを批判する著者の論拠には注目せざるをえない。では、著者は何を根拠に客家説を否定するのか。「鄧の故郷を取材中、彼を客家の出身という村人は皆無だった」からである。著者が「いく人の村人」に対して、「どのようなインタビュー」を試みたのか、その発言を「どのように検証」したのか。まるで記されていない。つまり、著者の「調査」なるものは、私がかつて批判した「朝日新聞」一九九二年一月一日付堀江義人特派員の「取材」と大同小異なのだ(現代新書、一五ページ)。

私自身は当時、文献資料のほかに、「明初に江西省吉安府廬陵県から移住した」とする「鄧氏族譜」をもとに推定したが、その後、客家説を裏付ける資料に接したので、付記しておく。凌歩機著「鄧小平在南」(中央

文献出版社、一九九五年七月）である。この本にこの明記してある。

「彼の祖籍は江西省吉安府廬陵県（現在の吉水県）である。明朝洪武帝十三年（公元一三八〇年）に江西省から四川省に入った。客家、民系に属している」（二二ページ）。

これは大陸で出版された資料として客家説を書いた嚆矢である。楊炳章の本は、一九九八年に出た。私がいま証拠資料として挙げた『鄧小平在 南』はその三年前に出ている。「歴史家である以上、中国専門家、いや非専門家の嘘八百発言に知らんかぶりを決めこんではいけない」（訳書一七ページ）という屈丈高なセリフは、楊炳章自身に対する警告としてよくあてはまるものではないか。

中央秘書長問題

楊炳章は鄧小平の一九二七年中央秘書長就任を否定して、「一九三〇年代です」が、党中央の秘書長になったという記録はない」という。その理由として「これは通常政治局長となり、周恩来、李立三のような地位にある者になった。鄧小平はまだ中央委員にもなっていないから」と書く。

さらに注記して「一九二八―一九二九年の上海

で、共産党中央秘書長は周恩来、次に李立三だった。当時、二人とも政治局員であり、党中央委員でない鄧小平がなれるわけがなかった」と補足している（訳書七七ページ、三三五―三六ページ）。

英文は以下の通り。

From October 1927 to September 1929, Deng worked as a staff member or secretary for the underground Party Center in Shanghai. Chinese official historians and Deng himself nevertheless claim that he held the position of *mishuzhang*, or *chief secretary* of the Party Center. (p.55)

No documentary evidence shows that Deng had ever in the 1930s been the Party Center's *mishuzhang*, or *chief secretary*--even further from its English translation "general secretary" or "secretary general". The official title of chief secretary did exist at some period in party history, and such a position was normally held by a Politburo member, such as Zhou Enlai or Li Lisan. Deng was not yet a Central Committee member. (p.57)

It became almost a casual habit for Deng

to brag excessively about his official seniority in the early 1980s. Despite my respect for Deng as a great politician, such a habit strikes me as odd and unnecessary. Deng should have known better than anybody else that, in Shanghai in 1928-29, the post of the CCP Center's *chief secretary*, or *mishuzhang*, had been held by Zhou Enlai and then Li Lisan, both of whom were full Politburo members, and not possibly have been held by a non-Party Center member like himself. (p.293)

「これは楊炳章の無知を示す。鄧小平が一九二九年に広西に派遣された後に、後任の「中央秘書長」となったのは余沢鴻（一九〇三―一九三五）である。余沢鴻は当時二十五歳、前任者鄧小平より一歳年上であった。李盛平主編『中国現代史詞典』（四九二―四九三）の「中央秘書長」という肩書が明記されている。楊炳章は当時の「中央秘書長」ポストを「中央総書記」ポストと混同して「政治局委員でなければならぬ」と誤解しているにすぎないのだ。当時の党内事情を知りなからである」。もしかつたら「これは不適切な英訳にひきかえられたものか。『鄧小平

文選』英訳を調べると、中央総書記も中央秘書長もともに General Secretary あるいは Secretary-General と訳されていて区別がない形になっている。

瑞金県書記就任の日時問題

鄧小平が瑞金県党書記に就任したのはいつか。著者は通説をこう批判する。

「党公認伝記作家は、一九三二年八月、江西ソビエト区に到着直後、瑞金県の党書記に任命されたという。この主張は根拠がないし、実際ありえない。もしその地位にいたのなら、一九三一年一月に瑞金で開催された、中華ソビエト共和国の樹立を宣言した第一回ソビエト区代表大会の長い代表者名簿に、名前が載っているはずである」「新資料にもとづくわけではないが、三一年二月もしくは三二年一月に瑞金県の党委員会書記となった可能性が考えられる」(『証書九〇ページ』)。

鄧小平は一九三一年八月、金維映、余沢鴻らとともに瑞金に向かった。瑞金に着くと、鄧小平一行は中共、東特委書記謝唯俊と会った。「そこで皆が協議して鄧小平を推薦して中共瑞金県委員会書記を担当させた」。

これは中共江西省委員会党史資料徵集委員会編『鄧小平在江西的日子』(中共党史出版社、一九九七年)所収の余伯流論文からの引用である(同書一〇三ページ)。

このとき瑞金はどのような状況にあったのか。

「一九三二年五月、(A B 団ではなく、ここでは社会民主党に対する)肅清運動が瑞金に及んでいた。瑞金の肅清運動の指導者は県委員会書記兼肅反委员会主任李添富であった」「県ソビエト政府と県总工会という二つの単位の八〇%の幹部が逮捕され、これらの幹部は一〇日以内に大部分が社会民主党分子として処刑された」「原県委員会書記鄧希平、県ソビエト主席肅連彬ら重要幹部も殺害された」「かくてほとんど毎日誰かが処刑され、時には一日で五〇―六〇人、少なくとも一〇―二〇人が処刑された」「鄧小平が瑞金県委書記を引き継いだ時、何人が処刑待ちであったか、確かな統計数字はない。しかし数百名いた可能性がある」(余伯流論文一〇三―一〇四ページ)。

鄧小平が瑞金に着いたのは、まさに国民党の第三次包圍討伐のなかで瑞金では凄惨な仲間殺しの最中であった。鄧小平は一力

月余、状況を調べたのち、李添富らを逮捕して殺害行為をやめさせ、逆にそれまで拘留されていた大量の幹部を釈放し肅清を終わらせたのであった(余伯流論文一〇四―一〇五ページ)。

こうして初めて九月に錦江中学で瑞金県第三次労働兵代表大会を開いたのであった。

この間の事情を余伯流論文は鄧小平「我的自述」、楊世珠「瑞金糾正肅反和查田運動的回憶」、鄧書春「鄧小平在蘇区瑞金」、瑞金県組織史資料」などに基づいて描いている。

さて楊炳章はこのような当時の瑞金の事情にまるで無知であり、党書記就任が「八月ではなく、「二月だ」などと根拠不明な憶測を書いている。もし楊炳章の説が正しいならば、九月中旬に瑞金で第三次反「包圍討伐」勝利大会を主宰したのは誰か、九月下旬に瑞金県第三次労働兵代表大会を開いた主宰者は誰か、答えて欲しいものだ。鄧小平の前任者は前述の通り李添富書記だが、まさか彼がこれを主宰したというのか。実は楊炳章の本には、李添富、そして余沢鴻の名さえ登場しないのだ。そのような無知に基づいて楊炳章は勝手な憶測を重ねている。これには驚かされる。

李明瑞の肅清問題

楊炳章はいつ。

「李明瑞の肅清に直接的ではないところ補助的にかかわっていた可能性は高い。半世紀後の八四年、李の名誉回復が取り沙汰される」と、李明瑞は左右江ソビエト区の功労者の一人といつのがふさわしいと鄧小平はすまなそうに指示を与えたのだった（『謝書九〇へー』）。該当箇所は以下の通り。

There are several documents suggesting that Deng sided with the security agency rather than standing against it, as his own daughter claims in attempting to eliminate Li and other former KMT officers from October 1929 up to June 1930. In his April 29, 1931, reports to the Party Center, Deng strongly blamed the "old foundations of KMT soldiers" for the failure of the Seventh Army. In all likelihood, Deng himself was involved, supportively if not directly, in the purge of Li Mingrui. Half a century later, in 1984, when this case was brought up for rehabilitation, Deng instructed apologetically, "It would be appropriate to say that Li Mingrui

had been one of the founders of the Left and Right River Soviet." (p. 69)

訳文の「すまなやうに」の原文は apologetically であるから、「この訳語は「弁解がまじく」とすべきである」。問題は「この記述の典拠である。

(20) 班鶯「鄧小平同紅七軍關係考」参照。
「鄧小平が紅七軍の肅清にかかわっていたことを示す歴史文書がたくさんある」と注記している。念のために、原注をみておく。

(20) See Ban Yang, "Verification of Deng Xiaoping's relations with the Seventh Red Army." "There are numerous historical documents that indicate that Deng might have been more actively involved in the Seventh Army purge. "If proved true, that would have serious implications for Deng's reputations and would also be of considerable interest to us." (p. 295)

比較して明らかでない「邦訳はイタリシクを訳していない。仮に訳せば「まじく記述が真実であると証明されるならば、鄧小平の容赦について重大な意味をもつのである」。それはまたわねわねいつつも相互に關心の深い事柄である」。

楊炳章の書く通り、これは実に重大な記述である。楊炳章は「こでも本文では、真実らしく書いて鄧小平に嫌疑をかけて、注釈では逃げ打っている。翻訳は、この注釈部分を省略したことによって、「鄧小平が紅七軍の肅清にかかわっていたことを示す歴史文書がたくさんある」と、強い断定のニユアンスになっている。

訳者がなぜ省略したのか。その真意を知りたい。これは鄧小平論の根幹にかかわる。決して小さなエピソードではない。

班鶯「鄧小平同紅七軍關係考」(『探索』一〇四、一〇五号、一九九二年)なる米國で発行されたらしい華文雑誌は見えていないが、これは政治運動のフロバガンダ雑誌ではないのか。また確認はしていないが、目見所ではないが、元來魏京生が創刊し、北京で発禁処分を受けたのち、米國で再刊したものでないか。これ以上の憶測は控えるが、他の論文で引用されたのを見たこととはなく、疑問が残る。楊炳章の問題の多い記述は、この『探索』を典拠としており、政治パンフを「學術書」に使つのは、よくない。資料批判が必要ではないか。

「こで李明瑞(一八九六〜一九三二年一〇

月の経歴を紹介しておくと、一九一八年韶関の求軍講武堂に入學。北伐戦争時に国民革命軍第七軍旅団長、師団長。一九二九年国民党政府広西綏靖司令。同年九月蒋介石反対闘争を組織し、三〇年龍州蜂起に参加する。同年中国共産党に入党。その後、中国工農紅軍第七、第八軍総指揮、紅七軍軍長。三一年四月紅七軍を率いて中央根拠地に入る。第二次、第三次反、包圍討伐の戦闘に参加。三一年一〇月、江西省于都で殺害される(李盛平主編『中国現代史詞典』四六九ページ)。問題は李明瑞の肅清と鄧小平の関わりである。

楊炳章は「直接的ではないにしろ補助的に」と関わっていたという。「補助的」とはなにか、その内容を説明することなしにこのような書き方をするのは、真意を疑われる。李明瑞の名譽回復は楊炳章のいう「一九八四年」ではなく、「一九四五年の延安七回大会」である。ここに重大な事実誤認がある。さらに、李明瑞を説得し、中国共産党に入党させたのはほかならぬ鄧小平である。当時の李立三による中央は「現地から彼を追放せよ」と命じていたが、『中共中央給軍委南方弁事処併転七軍前委指示信』(左右江

革命根拠地)上(三二五ページ)、そのような党中央の事情を知らずに、現場の鄧小平は同志として迎え入れたのであった(『毛毛』が父鄧小平』三二〇ページ、三五〇ページ)。

この事実から明らかなように、鄧小平が現場の判断で李明瑞を同志として迎えたにもかかわらず、極左派の党中央によって李明瑞が肅清された。その名譽回復は延安時代にすでに行われていたのである。これらの事実を無視して楊炳章は勝手な憶測を書き散らしているわけだ。

みずから説得して入党させた旧国民党軍の將校、同志として一連の行動を共にしてきた司令官の肅清に手を貸す、というのは、重大な事実である。鄧小平をそのような人物とみるか否かは、「鄧小平伝」の人物論の根幹に関わるのであり、具体的な論断をなにも挙げることなしに、決定的な論断を下す楊炳章の本は、「学術的」態度からにははるかに遠いし、鄧小平論としても致命的な欠陥をもつものと評さざるをえないのである。

政治委員の肩書き問題

楊炳章はいう。「いまある共産党の記録に

よると、鄧小平は広西蜂起時には政治委員ではなかった。ほとんどの伝記作家が政治委員だとしているが、実際は一九二九年二月一日成立の紅八軍にも、三〇年二月一日成立の紅七軍にもそのような職務はなかった。当時あったのは、政治部主任であり、第七軍は陳豪人、第八軍は俞作豫だった(八二〜八三ページ)。

事実の経過はどうか。一九二九年一〇月三〇日、中共広東省委員会は「中共広西前委」の設立を決定し、鄧小平を前委書記、すなわち前敵委員会書記に任命したこの「中共広西前委」が後の「紅七軍前委」である(『中共広東省委通知』一九二九年一〇月三〇日)。一月初め中央は左右江地区の武装蜂起を許可するとともに、紅七軍、紅八軍の編成番号が与えられた。二月一日、広州蜂起二周年を記念して紅七軍が正式に誕生した。張雲逸軍長、軍前委書記鄧小平(のちに軍政治委員を兼任)、陳豪人が軍政治部主任であった(『左右江革命根拠地』上)一五〜一六ページ)。

では鄧小平が軍政治委員を兼任したのはいつか。「中共中央給広東省委転七軍前委的指示」(一九三〇年三月二日)の末尾に以下

(の記述がみられる。

「軍に軍政治委員を設けるべきである。鄧小平を軍部政治委員に指定する」(『左右江革命根拠地(上)』二四八ページ)。

ここで明らかになったように、鄧小平は一九〇一年一月に紅七軍前委書記になり、その後三〇年三月二日付けで軍政治委員制度の新設に伴い、これを兼任したのである。なお、手元の国防大学編『中国人民解放軍戦史簡編』(解放軍出版社、一九八六年)四七ページを参照してみると、一九二九年二月一日、百色蜂起後、広西警備第四大隊と教導隊の一部が紅第七軍に改編され、張雲逸軍長、鄧小平前敵委員兼政治委員就任と書かれている。当時の資料および解放後の資料からして、鄧小平がまず紅七軍前委書記になり、その後政治委員も兼務したことは疑いのない事実である。したがって、楊炳章の書き方はきわめてミスリーディングである。

「紅七軍創設当時、政治委員のポストはなく、陳豪人が政治部主任を務めたこと」は事実だが、鄧小平はその上役の前委書記であり、政治部主任の上に政治委員ポストが新設されたときにこれに就任したのだから、陳豪人の上司にあたる。したがって、実際は欽差

大臣(勅使)のように振るまつた(訳書八三ページ)のは、まさに上司としての行動なのである。楊炳章は妙なレトリックを使い、却って実像を混乱させているといわざるをえない。これは読者を混乱させ、訳者はこれに振り回されて誤訳することになる。

一九五二―五六年の活動

一九五二―五六年の鄧小平の活動を総括して楊炳章はいう。

「鄧小平の着実な昇進には、一つ、あるいは二つの主要因がある。毛沢東の独裁力の影響と、戦争初期のような建設的任務を通してではなく党内部の権力闘争を通してその影響を利用したこと。実際この二つは相互依存的効果があったのである。毛沢東の独裁的権力が鄧小平のみごとな昇進を可能にし、鄧小平の急速な昇進が不幸にも毛沢東の帝国支配と、狂信的なユートピア路線を強化したのである(訳書一五九ページ)。

ここで「戦争初期のような建設的任務」とは、文意不明だが、それはさておくとして、このような評価は妥当であろうか。

五二―五六年に鄧小平は確かに地方指導者から中央指導者へ昇格したが、その「主

要因」を(1)毛沢東の独裁力の影響と(2)党内部の権力闘争を通してその影響(毛沢東の独裁力)を利用したこと、にあるとする解釈は妥当であろうか。

まず前者だが、五六年九月の第八回党代会までは、基本的に集団指導体制が守られていたとみるのが党史上の常識である。この期間について「毛沢東の独裁力」を強調するのは当たらない。また鄧小平は功績の大きかった第二野戦軍の政治委員として数々の戦果をあげているのだから、中央指導者への抜擢は自然であり、毛沢東との個人的関係をここで強調するのは妥当ではない。

次に、この期間に鄧小平が昇進し、地位を固めた理由を「党内部の権力闘争を通してその影響を利用したこと」にあるとする解釈も説得的な説明とはいいいがたい。高崗・饒漱石問題は確かに権力闘争であり、鄧小平が問題解決に貢献したことは確かだが、この事実をとらえて「権力闘争を利用した」という説明は無内容である。

「毛沢東の独裁的権力が鄧小平のみごとな昇進を可能にし」たのではなく、鄧小平の「戦果」が昇進させたのだ。

「鄧小平の急速な昇進が不幸にも毛沢東の

帝国支配と、狂信的なユーロトピア路線を強化した」というのも、当たってはいまい。

毛沢東の急進路線が明確な形をとって現れるのは、五七年六月の反右派闘争以後である。むろん五二―五六年段階においてもその萌芽がないというわけではないが、その萌芽だけを強調し、反右派闘争後に顕在化する毛沢東の独裁現象発現時期を無理に早めるだけ、鄧小平の昇進と無理に関連づけようとするだけの「新解釈」は、中国現代史の解釈として問題が残るだけでなく、鄧小平論としても、一面的にすぎる人物像を描く結果なるおそれがある。楊炳章が一五八ページで書いているように、八回大会の中央委員選挙で鄧小平は朱徳や周恩来を抜いて第四位の得票数を獲得した。これは大会に出席した代表たちが選んだものであり、毛沢東の決定ではない。このような党内世論を踏まえて、毛沢東は彼を政治局常務委員の候補者とし、総書記にも指名したのである。この間の事柄をすべて「毛沢東の独裁力」で説明しようとするのは、過度の単純化であり、説得力を欠く。

楊炳章の心理学（1）

楊炳章は鄧小平の心理を忖度して書く。「（鄧小平は）毛のおかげでほとんど拍子で出世したから、自分の才知や良心を犠牲にしても、毛についていくよりほかはない。左か右を選ばなければいけないなら、毛を喜ばすためだけに、左を選んだらう。この当時の彼の心理状態と行動は、偉くなりたてで、やる気十分だったといえよう」（一六二ページ）。

これはほとんど三文小説の心理描写である。ここで「鄧小平」を「楊炳章」に、「毛沢東」を「ロス・テリル」に置き換えてみよう。楊炳章はおそらく自分の尺度で鄧小平の「心理と行動」を描写したつもりらしいが、そこには大人の風格はひとかけらもない。「燕雀いづくんぞ、鴻鵠の志を知らんや」と慨嘆するほかない。歴史家なら歴史家らしく、政治学者なら政治学者らしく分析してほしいものだが、楊炳章の本にはまるで欠けている。

楊炳章はいう。

「ハンガリーとポーランドで起きた共産党政権にたいする大衆抗議に呼応するかのよう」に、毛沢東はまず双百政策を掲げ、百花齊放、百家争鳴、中国人民が自由に意見や不満

がいえると叫んだ。毛はさらに党内の整風運動、党幹部の欠点や誤りを見つけて正すことを始めた。第八回党大会で劉少奇は整風運動について何も言及しなかったし、鄧小平もそれにはたいした注意を払わなかった」（一六三ページ）。

ハンガリー動乱は一〇月二三日―十一月七日（ナジ逮捕）である。ポーランドのポズナニで反政府暴動が起こったのは、これに先立つ六月二八日―三〇日である。五六年四月ではない。毛沢東が百花齊放を提起したのは、さらに前の五月二日最高國務会議における講話である。このあたりの経緯に無頓着に、「呼応するかのよう」に」と書いているのは解せない。

「毛はさらに党内の整風運動を始めた」のに対して、劉少奇は「党大会で言及せず、鄧小平も注意を払わなかった」という記述は、矛盾だらけである。中共中央が整風運動についての指示を出したのは、翌五七年の四月二十七日であることは楊炳章が掲掲引用の直後に書いている通りである。その半年前に開かれた党大会で劉少奇がこの指示に言及しないのは当然ではないか。また鄧小平が「たいした注意を払わなかった」という記

述も理解に苦しむ。実に複雑な書き方が随所で行われていて、到底素直には読めない。

『鄧小平文選』と五八年の講話

楊炳章はいう。

「五八年に鄧小平が行った演説は、『鄧小平文選』にほとんど入っていない。大躍進中の彼の政治活動の様子は記録から明らかだが、本人の考え方は分からない。党のトップ指導層に属し、毛沢東が強硬な政策を押し進める横で、めだつた存在に違いない。政府公認出版物から大躍進期間中の講話、演説だけをきれいに削除したこと自体、明白な証拠になっている。」(一六七ページ)。

五八年に鄧小平が行った演説は、『鄧小平文選』に「ほとんど入っていない」というよりは、「一篇だけ収められている」とより具体的に書くのがよい。それは五八年四月七日に中央書記処会議で行われたもので、内容は教育問題である。『文選』にはこれしか収められていないのは事実だが、ここから、彼の政治活動の様子は記録から明らかだが、本人の考え方は分からない」と書くのは真意不明である。「記録から明らか」ならば、「本人の考え方を分析できるはずである。いわんや楊炳

章は三文小説的「心理解説」がお得意ではないのか。

たとえば『毛沢東選集』には限られた著作しか収められていないが、建国以前は日本で編集された『毛沢東集』によって、建国以後のものは『建国以来毛沢東文稿』および『毛沢東文集(六・八巻)』によって、基本的にすべて読める条件が整っている。鄧小平についての『文稿』のようなものは未だ出ていないが、一九五八年の鄧小平の活動と発言を調べるには、いくつかの方法がある。まず、『新華月報』の前身たる『新華半月刊』があるし、『人民日報』のマイクロフィルムあるいは現物が挙げられる。ここで特筆すべきは、『人民日報』が創刊以来のCD ROMを発売している事実である。『文選』に収められていないから読めないといった言い訳は、不真面目な学生の「逃げ口上」以上のものではない。まともな研究者なら恥ずかしくていえないセリフであるはずだ。この事実をとらえて、「政府公認出版物から大躍進期間中の講話、演説だけをきれいに削除したこと自体、明白な証拠になっている」とまで書くのは、ほとんど三言二語である。『鄧小平文選』はなるほど

「政府公認出版物」だが、そこに五八年の発言を一篇しか収めなかったことは、編集方針、編集意図に属する事柄である。それを分析するのは当然だが、それを怠ったまま「明白な証拠」と書くのは、真意不明というほかない。

土法製鉄運動について

「一九五九年四月になって、中央書記処は鄧小平の掛け声でいっさいの資源を集結する土法製鉄運動を始めることを提案した」(一六八ページ)と書くのもおかしい。

一九五八年の鉄鋼生産量を五七年比倍増の一〇七〇万トンと決定したのは、北戴河で開かれた政治局拡大会議であり、五八年八月一七日である。翌五九年四月二日〜五日に八期七中全会が開かれ、五九年の国民経済計画案が決定された。続いて四月一八日から二八日にかけて二期全人代一次会議が開かれ、周恩来の「政府工作報告」を採択し、同時に國務院の提起した五九年国民経済計画草案も採択した。ここで採択された数字、たとえば鉄鋼生産量は「五八年の倍増」という到底実現不可能なものであった。事柄の経緯は以上のごとくであり、「鄧小平

の掛け声」で「提案された」のではない。鄧小平は総書記として、全人代決定を「実現するための具体化」に取り組んだのである。この経緯は、楊炳章がこの項目を書くために用いている資料（房維中主編『中華人民共和國經濟大事記』の二二〇、二二三、二四四ページ）に詳しく書いてある。

一連の経緯を無視して「断章取義」を行うのは許されない。大躍進において鄧小平が毛沢東の冒進を支えたことは明らかである。それゆえにこそ、彼は調整期に率先して「白猫黒猫論」を唱えて、経済復興に取り組んだのだ。そのあたりの常識的知見に対して一部を誇張してみせることになって、鄧小平の政治的伝記なるものを書いたというので、それが「学術的著作」たりうるかどうかはなはだ疑わしい。

中ソ論争について

「つき詰めてみるに、中ソ論争での鄧小平の立場は、好戦的な国家主義、愛国主義と分析できる。当時の状況下で、毛沢東の「機嫌をとることに終始した結果といえよう。鄧の態度がラジカルになればなるほど、ソ連との議論が激すれば激するほど、毛沢東は

「ご機嫌で、鄧の政治的地位は安泰だった。マルクス・レーニンの著作から引用したにもかかわらず、後にも先にもそれを熱心に読んでいないし、読もうともししていない」（訳書一八三ページ）。

原文は以下の通り。

In the final analysis, one may justify Deng's position in the Sino-Soviet polemics as a kind of Chinese nationalism or patriotism or even chauvinism: without getting too far-fetched, however, I would simply ascribe Deng's performance to his personal desire to please Mao under the current circumstances. The more radical his position and the harder he argued with the Russians, the happier the chairman and the safer Deng's own political position. As for those works of Marx or Lenin, Deng had never cared to read them before, nor did he ever care to do so afterward. (p.158)

イタリックの部分は「ある種の中国ナショナリズムあるいは愛国主義、いや排外主義」である。訳者は「好戦的な国家主義、愛国主義」と訳したが、「どこから」好戦的、「どういう」形容句が出てくるのであるか。次

のイタリック部は、「マルクスやレーニンの著作についていえば」であり、「引用云々」とは書かれていない。楊炳章は「マルクスやレーニンの著作を」後にも先にもそれを熱心に読んでいないし、読もうともししていない」と断定しているが、そのような断定がなぜできるか不可解だ。

林彪事件

「一九六六年五月の政治局会議での林彪の演説を読んで、毛はもつと早く気づくべきだったと考えた。林彪は、「奴らはわれらを殺そうとしている。こちらが殺さなければいけない。もし殺さなければ、殺されるだろうから」中国史は、るるその炎と剣の影に彩られたクーデターの歴史だ」と不遜にもいった。毛沢東は、彭真も楊尚昆も、劉少奇も鄧小平をも嫌ったが、林彪の演説を聞いて「思」たのだらう（一九七ページ）。後掲のイタリック部分は「毛は憂慮するようになった。もつと早くから憂慮するようになったが」の意である。次は、「いま林彪將軍が（クーデタを）宣言するのを聞いたあとでも、やはり鄧小平ら実権派を嫌っていたのだらうか」の意である。

原文は以下の通り。

Reading through Lin's speech at the Politburo conference of May 1966, Mao grew worried, as he *certainly should have*. The chairman might indeed have disliked Peng and Yang, Liu and Deng, but *what about now hearing Marshal Lin declare*, "These SOBs want to kill us, and we must kill them. If we don't kill them, they kill us," and listening to him lecture that "Chinese history is nothing but a history of coup d'etat, of candle flashes and knife shadows" (p. 170)

「鄧小平がまじり口にした言葉は、天が呪いし林彪を殺した」と述べた（一九八〇年）。

It was reported that, when informed of Lin's fate, Deng's first words were, "Heaven damned Lin to death!" He promptly wrote a letter to Mao on November 15, 1971. (p. 171)

「この時の鄧小平のセリフはかなり有言無言な。」「林彪不亡」「天理難容」と述べた。

わたしがかつて「林彪亡らねば、天理容れぬ」と述べた。このあたり、記者の弁解を聞きたいところである。原文は明か

かに中国語だ。楊炳章が英語に訳した。それを加藤が日本語に訳す。いわゆる重訳はやはり極力避けるべきではないか。

林彪事件についての楊炳章の注釈が気になる。

「林彪の飛行機が燃料不足で墜落したのが、周恩来の命令で撃ち落とされたのが疑問である。いろいろいわれているが、私の判断では後者の可能性が強い（三四三―三四四ページ）。

原文は以下の通り。

The real question regarding the Lin Biao affairs is whether Lin's plane crashed for lack of fuel or was shot down on orders from Zhou. Despite all the popular remarks and recollections, there remains the latter possibility, which is, *in my own judgment*, rather strong. (p. 305)

わたしが「私の判断では in my own judgment」と述べ、根拠は何も挙げておいてない。もし楊炳章の「撃ち落とされた」の命令で撃ち落とされた」とあると、周恩来論に新たな解釈を付加する必要があるほど大きな問題である。これは片じ師の「託言」であり、研究者のやるべき立場ではない。

第一次天安門事件の死者

「この事件で死者がほとんどいなかった」とは指摘しておきたい。台湾の報道機関は死者五〇〇人と故意に誇張した数字を流し、それを単純に信じた記者もたくさんいたが、（三三三―三三三ページ）。

「死者がほとんどいなかった」という日本語は成り立たない。死者があったのかなかったのか、不明か、いずれかである。

Nevertheless, it should be pointed out that there were *few casualties in this incident*, certainly not as many as fifty thousand a deliberately exaggerated figure published in many Western writers. (p. 195)

「この注記」が「この天安門事件では誰も死ななかった」（説書三四五―三三三）と書いておられるのは正し。しかし、本文は誤訳である。「この注記」が「ほとんどいなかった」と記述している。

As far as I can tell, *nobody died in that Tiananmen incident*, and Ye Jianying's speech, referred to by Han and Evance, is a fabrication. (p. 307)

復活後のポスト問題

「党中央は、鄧小平が副首相ポストを回復すればいいという考えだった。副首相は七三年以前の地位だが、鄧は誤りを犯したことを認めただけではないが。華国鋒はまた優柔不断になった。しかし葉剣英と李先念は鄧の復活が不可避なら、いっそ七六年四月の天安門事件で失った地位に復帰させようと思いた。二人は鄧小平の素晴らしい可能性に気づいていた。いままで喜ばせてくれたが、今度は鄧を喜ばせてあげよう。もちろん、いまをもうしなご」(原書1334ページ)

There were still suggestions within the Party Center that Deng should be rehabilitated only as deputy premier, as in the precedent of 1973. Didn't Deng himself also admit that he had some mistakes? Hua was hesitating again. But Ye Jiaying and Li Xiannian were resourceful enough to realize that, since Deng's restoration was inevitable, they would rather have Deng resume all the positions he had lost after

the Tiananmen incident of April 1976. They realized Deng's great potential. Instead of Deng trying to please them, it was their turn to please Deng. Why not do something now rather than later?(p.203)

「副首相は七三年以前の地位だが、の箇所は、一九七三年当時の(復活の)先例のちうに、意図あり、誤訳である。『復帰させようと思いた』ではなく、復帰させようと思はれた(智力にそいし華国鋒と比べて)計略的であった、意図である。

このような書き方が楊炳章の人物論の特徴である。鄧の「素晴らしい可能性」に気づいてた、のではなく、ひとたび復活させたが、「一萬千里、そくまていかわるをえなご」ことを認識してたの意である。「いままで喜ばせてくれたから、今度は鄧を喜ばせてあげよう、は文意不明である。『われわれは鄧小平が(手紙などを書こう)懇願する側にあつたが、いまは主導権つこう』の意である。

真理基準論争

「じじの始まりは學術論文だった。一九七八年五月一日、『光明日報』に「真理を檢

証する唯一の基準は実践である」と題する論文が載った。學術的トーンとは裏腹に、胡耀邦が指示するじじの論文は、党のインテロキートと宣伝分野を握っていた汪東興に向けられてた(1335ページ)。

Where there is a will, there is a way! It all started as a matter of academic discourse: on May 11, 1978, Bright Daily published an article entitled "Practice is the Sole Criterion for Truth." Despite its academic tone, the article, sponsored by Hu Yaobang, was directed against Wang Dongxing, who was in charge of the party's ideology and propaganda work. (p.204)

「じじの始まりは學術論文だった、ではなく、サベツは學術論争の事柄として始まった、の意である。

「一九七九年は、鄧小平自身が進めた「名譽回復」の一年だった。まず、七六年の天安門事件の名譽回復、つぎに六六年の文化大革命、つぎに五九年の反彭徳懷運動および五七年の反右派闘争と続いた。その結果、これらの政治運動の犠牲者たちはつぎからつぎへと冤罪が晴れて、党や政府の指導部に復活した。(1339-1340ページ)。

Notably, 1979 was a year of "reversal of verdicts," under Deng's personal guidance. First came the reversal of the verdict on the 1976 Tiananmen incident, then on the 1966 Cultural Revolution, the 1959 anti-Peng Dehuai movement, the 1957 anti-rightist campaign, and so on. Consequently, one group after another of former victims of these political movements were vindicated and restored to various levels of party and state leadership. (p. 208)

これらの名譽回復は一九七八年の三中全会で決定されたものだ。その決定が翌年から実行された経緯がある。楊炳章はこの三中全会決定に触れずに、あたかも七九年に突然始まったかのよう記述している。杜撰な記述の一例である。同じく冤罪が晴れて、党や政府の指導部に復活した人々にちって華国鋒体制が崩れる。その因果関係の説明に成功したことはない。

For the same reason, the anti-rightist campaign could be only partly reversed; the campaign was now held to have been necessary in the first place but excessive in terms of result. (p. 208)

「同じ理由で反右派闘争の名譽回復も部分的なもので、名譽回復すべきものが最終的に実現せず、かえって過ちが拡大した(二四〇ページ)。

この訳文は文意不明である。「反右派闘争は一部の名譽回復しか行われなかった」というのは、反右派闘争はなによりも必ず必要なものであり、ただ結果的に行き過ぎたにすぎないという解釈からであるの意だ。「鄧小平と華国鋒の対決は、七九―八〇年の国内経済活動において、鄧小平が華国鋒の左派路線を攻撃したことで決定的になった。おもに陳雲が華国鋒の経済政策を批判し、鄧小平は華国鋒の地位を狙っていたからだ。この微妙な差は重要で、注意が必要である。(二四一ページ)。

Interestingly although it was hitherto either not known or under-estimated the political showdown between Deng and Hua took the form of the former's attack on the latter's "leftist line" in national economic affairs during 1979-80. In that struggle, Chen Yun was drawn in as the main critic of Hua's economic policy, as Deng really aimed at Hua's political power.

There were subtle and yet important differences between the two positions, which should be carefully examined. (p. 209)

経済通の陳雲をもちあげて鄧小平をくす作戦のようだが、「華国鋒の地位を狙っていただけ」という断定がなぜ可能なのか、根拠は示されていない。

Chen Yun as director and Li Xiannian as deputy director of the Central Financial and Economic Group (p. 210) どちらも head of the Central Financial and Economic Group (p. 211) の訳語に同じ。

「陳雲は財政経済委員会主任、李先念は副主任として(二四二ページ)」、「陳雲に代えて趙紫陽を中央財政経済委員会の主任にした(二四二ページ)」と訳しているが、この箇所は正式名称「中央財政経済指導小組」と訳すべきであり、「中央財政経済委員会」とは異なる機関だ。

華国鋒の辞任の経緯

「華国鋒は八〇年一月の会議で、経済状態はそれほど深刻でない、もし問題があるとしたら私一人で責任を負えないと反駁した。華の発言は正確だったから、しかし悲

しいかな責任を負えないなら、辞めてもらおう、というところになった(訳書二四三〜二四四ページ)。

Hua himself argued at the December 1980 conference that the economic situation was not at all critical and that, even if there had been some problems, he could not be held solely or mainly responsible. Hua might have been quite right in this regard. But alas, if you could not be held responsible, then you should be relieved of your responsibility! (p.211-212)

この書き方は杜撰であり、経緯は以下のようであった。

一月一〇日から二月五日にかけて政治局会議が連続九回開かれた。主な議題は一期六中全会(八月六月二七〜二九日)に提起する人事問題であった。『歴史問題決議』の討論過程で華国鋒に対する批判が高まり、華国鋒は辞任を申し出た。その結果、華国鋒は党中央主席、軍事委員会主席を辞任するが、政治局常務委員および党中央副主席の地位は保持すること、代わりに胡耀邦を党中央主席に、鄧小平を軍事委員会主席に選ぶことが決定された(馬青彬主編『中

国共産党執政四〇年』中共党史資料出版社一九八九年四六五ページ)。

一連の政治局会議で特に議論になったのは、四人組粉砕以後、華国鋒が文化大革命の誤りを是正せず、老幹部の冤罪事件の名譽回復に消極的であったことである。経済工作における誤りにも「重要な責任がある」と批判されたが、華国鋒批判の核心は「脱文革期における文革路線の継承」である。楊炳章の記述はきわめて一面的である。

趙紫陽と鄧小平の関係

趙紫陽は七九年に四川省で、同様のこと(百留地と副業の奨励)をおこなった。それには政治的要素が含まれていた。万里はすでに、趙紫陽はまもなく鄧小平と密接な関係になったのだ(二四五ページ)。

Zhaoziyang followed the same line in Sichuan in 1979. There were political factors involved; Wan already had, and Zhao soon would have, a close personal relationship with Deng? (p.212)

楊炳章は趙紫陽が七九年に万里と同様のことを行っていたのでも、まもなく鄧小平と親密な関係になつた(a close personal relation-

ship with Deng)と記述しているが、これは正しいか。

趙紫陽が四川省第一書記に就任したのは七五年一〇月のことだが、この人事が周恩来と鄧小平の提案によることは常識ではないか(たとえ趙尉『趙紫陽伝』香港中華書局、一九八八年二五八ページ)。そして四川省での活躍が認められて八〇年二月に一期五中全会で政治局常務委員に抜擢され、四月に國務院副首相に昇格するのだ。

鄧小平の権力欲

「鄧小平は、華国鋒を主席の座から降ろすのには一生懸命だったが、おかしなことに自分からその座に昇ろうとはしなかった。(中略)もっと正確にいえば、形式的な肩書より実質的な権力に関心がある。彼は国家政策の問題、すなわち共産党と中華民族について何が大事かに関心がある。」(二四六〜二四七ページ)

It seemed a little puzzling that Deng had worked so hard to knock Hua Guofeng out of the leadership and yet refused to don the mantle of leadership himself. More precisely, he cared more about substantial

power than about formal title, and he also cared about impersonal policy issues, or what he thought would be good for the Communist Party and the Chinese nation. (p.214)

楊炳章は鄧小平を「権力亡者」のように描くので、せっかく華国鋒を打倒しながら、みずからはその座に座まつていない鄧小平の行動を理解できない。そこで「パズルのように見える」といふ。実際、鄧小平は楊炳章が後段で書いているように、彼個人の地位や肩書よりも「共産党と中国国民にとって」、何が大事かに関心があったのである。このような政治家こそが称賛に値する政治家ではないのか。ここでは楊炳章の描く鄧小平像が実際にそぐわないところをみずから暴露した形になっている。

楊炳章の心理学 (二)

「鄧小平の心理も面白い。華を引きずりおろしたが、自らその主席のポストにつくのは気が進まずにためらった。胡耀邦を引き上げ、自分が副主席に甘んじているように、胡に主席という肩書を許すのも不本意である。毛主席と困難な波瀾の多い年月をともに

過した鄧は、主席のポストには恐れ多い感じが拭えなかった」といって、胡主席の誕生は絶対的に許せぬ。党指導機構の改革を気軽にとりかえすきていないが、そうではあるが、これが実情なのだ。鄧の心理を直感的に分析してみたが、「確かな引用」や「確固たる事実」による分析以上に実りが多い場合もある(一五〇ページ)。

Deng's own thought processes provide the clue! He pushed Hua down but felt reluctant to take over Hua's post. He pulled Hu up but felt reluctant either to line up with Hu as deputy chairman or to grant Hu the title of chairman. After having worked with Chairman Mao for so many eventful years, the title of chairman had left Deng with a great many awesome and awful impressions. It would be too much to have another chairman---this time, Chairman Hui Does this sound too banal as an explanation for the solemn reform of party leadership? Perhaps it is, but it happens to be the truth! This kind of intuitive analysis of Deng's thought processes, I would say, may be more fruitful

than many "definitive quotes" and "hard facts". (p.217-218)

またDeng's own thought processesを鄧小平の心理」と訳すのはよくない。「鄧小平の思考過程あるいは考え方の道筋」ほどの意味であろう。楊炳章は一連の機構改革を鄧小平の恣意によって説明しようとするから、三文文士の説明になる。

当時は、まず復活幹部を多数政治局に送り華国鋒に掣肘を加え、八二年九月の党大会では中央書記処(総書記は胡耀邦)の書記を増やして、肥大化して機能不全の政治局の権限を事実上中央書記処に移した。同時に中央顧問委員会と紀律検査委員会を新設して長老幹部をここに移す。そして八五年九月の党代表会議で若返りを図り、八七年の第一三回党大会でようやく政治局主導の精鋭体制ができた。この間のジグザグは鄧小平・陳雲らの実権派連合軍の再編成過程であり、鄧小平は妥協と多数派工作を通じて一連の過程を進めざるをえなかった。そのような現実の過程をまるで無視して、楊炳章は身勝手な分析を行っ。そして最後に「確かな引用」や「確固たる事実」による分析以上に実りが多い場合もあると思っ」と

自画自賛している。一連の過程を知る者にとつては、まるで無益で、説得力を欠いた説明である。これは学術の世界とはかけ離れたものであるというほかない。

後世畏るべし

最後に訳者の見解を確かめておきたい。訳者を代表して加藤千洋はいう。

「本書がもつ最大の意義は、中国に生まれ、大学教育を受けるまで中国大陸に育った普通の人間によって書かれた点にある」(三五三ページ)。楊炳章が「大学教育を受けるまで中国大陸に育った」ことは事実である。楊炳章は「普通の人間」であろうか。ハーバード大学で博士号を得て、中国人民大学の教授になる人物が「普通の人間」なのであるか。楊炳章の価値観や研究者としてのスタンスにかなり重大な問題のあることは明らかではないのか。百歩譲って仮に「普通の人間」の鄧小平伝とする加藤の判断を認めたとして、それがなぜ意義深いことなのか、私には理解しにくい。

「(党公認史家による伝記は)できるだけ冷静、客観的に研究対象に迫ろう」という伝記作家として最低限必要な条件が備わって

いない。そして「外国人の手になるものも、中国革命の複雑な経過に対する研究不足や単純なミスや事件の背景分析などに限界が見られる」(三五三ページ)という楊炳章の言い分を加藤はそのまま認めているようだ。言やよし。しかし、このような批判的コメントの姿勢をみずからの著作において貫徹できるかどうかはまったく別の事柄である。楊炳章が指摘した問題点はすべて、彼自身の著作の随所に発見できることの具体例を私はいくつか挙げてみた。読者はどう判断されるであろうか。

楊炳章の著作を本書から拾うと以下のごとくである。

(1)「毛沢東の権力へのステップ、遵義会議」『チャイナ・クォーターリー』一九八六年六月、一〇六号

(2)「複雑性と合理性、李立三の冒険の再評価」『オーストレイリアン・ジャーナル・オブ・チャイニーズ・アフェアズ』一九八九年一月、二二号

(3)「革命から政治へ、長征における中国の共産主義者たち」ウェストビュー・プレス、一九九〇年

(4)「プラグマティックな共産主義者の形成、初期の鄧小平一九〇四—一九四九」『チャイナ・クォーターリー』一九九三年九月(のち、「鄧小平・政治的伝記」シャープ社、一九九八年)。

これらの著作から判断すると、楊炳章は遵義会議、李立三問題、など四九年以前の中国共産党史の諸問題を扱う専門家を自称しているごとくである。私はハーバード大学で誰が彼の博士論文を審査したのか、問い合わせてみたい気分である。このような欠陥だらけの駄作を国分良成教授(慶応大学法学部)が訳者に紹介した理由が分からない。訳者加藤千洋中国総局長は、翻訳の過程で疑問を感じなかったのであるか。もう一ついえば、『朝日新聞』に提灯書評を書いた山室信一教授(京都大学人文科学研究所)は、疑問を感じなかったのか。

「後生畏るべし」とはこのことであつたと花甲をすぎたいま評者は戦慄を覚える。

「追記」東方書店の『月刊東方』の依頼で書評を書いたが、あまりにも長くなったので、要旨のみを掲載していただくことになった。これはその全文である。

